

弥生土器 1

大野城市教育委員会



市内出土の主な弥生土器

弥生土器とは

弥生土器は、今から約2300年前から約1700年前まで使われていた古代の土器で、弥生土器が使われた約600年間を弥生時代とよんでいます。弥生土器という名は、東京都文京区の弥生町遺跡からとったものです。最も古い弥生土器は北部九州で作られ、その後、稲作を始めとする様々な文化と一緒に、北海道と南西諸島を除く日本各地に広がりました。

弥生土器は窯を使わずに、600度～800度の温度で焼かれた素焼きの土器で、一般に赤い色をしています。材料である粘土の質や、埋まっていた遺跡の土質によって、黒っぽいものや白っぽいものもあります。弥生土器の種類は、貯蔵用の壺、煮炊き用の甕、食べ物を盛る高杯や鉢、壺や甕の蓋などが主なものです。時期と地域によってその形には様々な変化が見られ、その変化によって、弥生時代は前期・中期・後期の3時期に区分されています。大野城市でも多くの弥生時代の遺跡が発掘されていて、弥生土器も多数出土していますが、時代的な割合は中期の弥生土器が最も多く、前期、後期の弥生土器がこれに次いでいます。

古墳が造られるようになり、時代が弥生時代から古墳時代へと移り変わると、土器も弥生土器から土師器へと変わっていきました。



上の2つの壺は、墓の中に収められていたもの（副葬品）です。

左の壺は高さ16.9cmを測ります。口縁部（口の部分）は外側に開き、頸部（首の部分）には、はっきりと分かる段をつけています。胴部（腹の部分）は強く外に張り出し、底部（土器の底）と胴部の境は明瞭です。肩部（肩の部分）にはヘラで描いた3本の線が、胴部には最も張り出した部分に1本の線が巡り、その上に3本を一単位とするヘラで描いた上向きの円弧状の文様（重弧文とよびます）が6個施されています。表面はていねいに磨いて仕上げられていて、所々に赤い色の痕があります。今は黒っぽくなっている土器ですが、もともとは全体が赤い壺だったと考えられます。

右の壺は高さ17.9cmを測ります。頸部の段は明瞭ではありません。頸部と胴部の境には、断面が三角形をした帯状の立体的な文様（凸帯とよびます）が一周しています。その下、つまり肩部にはヘラで描かれた4～5本の線が一周し、その線をはさんで上下にやはりヘラで描かれた斜めの線の文様（羽状文とよびます）が、向きを互い違いに変えて施されています。胴部の張りはそれほど強くなく、胴部と底部の境もはっきりとはしていません。

2つの壺とも弥生時代前期の壺ですが、左の壺は前期の中頃、右の壺はそれよりもいく分か後の時期のものです。



左は弥生時代の前期末から中期初頭にかけての甕で、高さ29.7cmを測ります。全体的な形は教会の鐘をひっくり返したような感じです。口縁部はゆるやかに外側に開き（これを如意形口縁とよんでいます）、その下に断面三角形の凸帯を1条貼り付けています。底部はいったんすぼまってまた開きますが、小さく、やや安定さに欠けます。また、写真ではわかりませんが、底部の裏側は大きくくぼんでいます。しかし、内側は上げ底になっているのではなく、どうして外側だけをくぼませているのかは不明です。